

映像作品を用いた高校国語(現代文)の授業試案 ——宮崎駿『千と千尋の神隠し』・『崖の上のポニョ』の場合——

河原木 有二^{*1}・一氏 由希^{*2}・岡部 利圭子^{*2}

^{*1}九州女子大学人間科学部人間発達学科人間基礎学専攻

^{*2}2012年度(平成24年度)九州女子大学人間科学部人間発達学科卒業生

北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2013年6月6日受付、2013年7月11日受理)

1. はじめに

宮崎駿監督のアニメーション作品は、いまや広く世界に向けて発信されている日本文化の1つとして数えられるとあってよいだろう。2003年(平成15年)、第75回アカデミー賞で長編アニメーション賞を受賞したということもあるが、それ以前から世界中で日本の漫画・アニメ文化が紹介され、定着してきたという状況も背景としてある。

また、「宮崎アニメは好きだし、楽しめるけれど、なんとなくわかりにくいところがある」という声の聞かれることも事実であり、作品を一見しただけで作り手(宮崎駿監督)のねらいや意図を全て捉えることは確かに難しい。これは裏を返せば、宮崎駿作品が〈読解の対象たりうる〉ということで、実際に国語教育の現場でも宮崎アニメが教材として用いられるようになってきている。私自身も、勤務する大学で2010年度(平成22年度)から教員免許状更新講習を担当しているが、そこでお会いする現場教師の方々の実践を耳にすることも数多くあった¹⁾。

本稿では、『千と千尋の神隠し』と『崖の上のポニョ』といった〈モノガタリ〉を国語の授業材料として取り上げていく。両作品の分析を通して、宮崎駿作品の魅力や作者のねらい、作品にこめられた子どもたちへのメッセージを読み取るとともに、現場での実践に供すべく授業プランを提示していきたいと考えている。

具体的には、第2章で『千と千尋の神隠し』、第3章で『崖の上のポニョ』について、それぞれあらすじと読解のポイントとして着目すべき事項について論じ、第4章で両作品に共通する要素について述べる。これらを踏まえた上で、第5章で国語の授業プランの提示へと至る。

なお、第1・4・5章を河原木が、第2章を一氏、第3章を岡部が分担執筆した。一氏・岡部は九州女子大学人間科学部人間発達学科の2012年度(平成24年度)卒業生であり、2人の担当する章はそれぞれの卒業論文をベースに改稿したものである。

2. 『千と千尋の神隠し』教材分析

(2.1) あらすじ

小学4年生の女の子千尋は、家族で新しい町に引っ越してきた。家に向かう途中、林の中に迷い込み、トンネルを見つける。そのトンネルを抜けるとそこには不思議な町が広がっていた。そこで両親は、誰もいない飲食店で勝手に食事をはじめてしまう。千尋は、お風呂屋を見つけ橋の下を見ていると、目の前にハクという1人の少年が現れる。ハクに命じられ、急いで来た道を戻り両親の元へ行くと、2人は豚になっていた。再びハクが現れ、消えかかる千尋に食べ物をさし出し、両親を人間の姿に戻し元の世界に帰るには、湯屋で働かなければならないことを伝える。

千尋はハクに教えられた通りに、湯屋で働くためにまずは釜爺の元を訪れる。しかし、働くためには、湯婆婆と契約を交わさなければならない。そこで、湯屋の少女リンに手引きさせ、湯婆婆に会いに行かせる。湯婆婆と契約はできたものの、千尋という名前は奪われ「千」という名に変えられてしまう。

早朝、ハクは豚になった両親を千に合わせる。そして、千尋が着ていた洋服を手渡す。そのポケットには「ちひろ」と書かれたカードが入っており、既に忘れかけていた自分の名前を思い出す。ハク自身は自分の本当の名前をどうしても思い出せないのだと伝える。

その日の夜、千は橋で見かけたカオナシを客と思い込み湯屋の中へと招き入れてしまう。千は大風呂の掃除を任せられ、カオナシからもらった薬湯の札を使い綺麗にする。そこに、汚れたオクサレサマ（実は高名な川の神）が訪れ大風呂に入るがなかなか汚れが落ちない。千はオクサレサマの体にとげがさきさきしていることに気付き、湯屋全員でそのとげをぬく。すると、体から大量のごみや自転車が出てきた。オクサレサマは喜び、千の手の中に「苦団子」を、辺りには砂金を残して帰っていく。

真夜中、風呂場に砂金を探しにきた青蛙は、その場にいたカオナシに飲み込まれてしまう。カオナシは、青蛙の声を使って湯屋で働く者達に、大量の食事と風呂の準備を命令し、どんどん肥大化していった。

早朝、千はたくさんの小さな紙に追われている白龍を見つける。千尋はその白龍を見て思わず「ハク」と叫び、助けようとするが白龍は大きな傷を負っていた。ハクは湯婆婆の命令で、双子の姉である銭婆の「魔女の契約印」というハンコを盗んできたのであった。

湯婆婆がカオナシの所へ行っている隙に、千は白龍を助けようとするが、湯バードや3匹の頭が邪魔をする。そこに、千についてきた小さな白い紙から銭婆が現れる。銭婆は、坊を坊ネズミに、湯バードを小さなハエドリに、そして3匹の頭を坊に変えてしまう。白龍は必死にあがき、なんとか釜爺のいるボイラー室へ飛び込む。そこで千は、オクサレ様からもらった苦団子の半分を白龍に食べさせる。白龍は、まじないのかかった魔女の契約印と蟲を吐き出す。

千がカオナシに会いにいくと暴れてさらに肥大した姿になっていた。千は持っていた残りの苦団子をカオナシに食べさせる。すると、カオナシは食べたものを次々に吐き出し、千に襲いかかってくる。千はカオナシを湯屋の外に導き、カオナシも吐き続けながらも本来の姿へと戻っていく。千は、坊ネズミとハエドリ、そしてカオナシを連れて銭婆にハンコを返しに駅へと向かう。

千尋が銭婆の住むところへ向かっている途中、ハクは目を覚ました。ハクは湯婆婆の元へ行き、坊を連れ戻す条件と引き替えに千と両親を元の世界に戻すように願い出る。

千は銭婆の家を訪れた。銭婆はお茶を振る舞い、優しく接してくれる。また、坊ネズミとハエドリ、カオナシとみんなで作った髪どめを千尋にプレゼントする。そこに白龍が迎えにやってきて、千尋たちを連れて帰るが、カオナシは銭婆の家に残った。

千尋は白龍の背中で、昔、川で溺れたことがあると話し始める。その川の主がハクであることに気付いた千尋は、川の名前は「コハク川」だと告げる。ハクは自分の本当の名は「ニギハヤミコハクヌシ」だということを思い出す。

朝、二人が湯屋に戻ると、湯婆婆は千尋に12匹の豚の中から両親をあてさせる課題を出す。千尋は見事にそれをクリアし、湯婆婆との契約が切れる。そして両親は人間の姿に戻り、千尋とともにトンネルを抜け元の世界へと戻っていったのだった。

(2.2) 名前の大切さ

この作品の題名は、千尋が湯婆婆に名前を奪われ「千」として湯屋で働くことから2つの名前が表現されている。『千と千尋の神隠し』という題名には、深い意味があるのではないかと。

では、なぜ「千尋」と「千」という2つの名前が必要だったのか。「千」という名前は、千尋が湯婆婆に名前を奪われ「千」に変えられたことによるものである。湯婆婆のもとで働く者が大勢いる湯屋は、奴隷的な社会の雰囲気を感じさせる。名前には、その物が何であるか、どんな役割が課せられているのかを区別するなど様々な意味が込められている。人の名前は、その人となりまでも認識させるものとなるのだ。したがって、湯屋での千尋は今までの千尋とは違う。両親もおらず、毎日働くだけの「千」という1人の人間になるのである。

次に、2つの名前が象徴的に用いられているものはないかと調べた。双子の湯婆婆と銭婆もそれぞれ違う人物であるが、銭婆の言葉「2人で一人前なのに」からそれぞれの役割があるのではないかと考える。湯婆婆と銭婆は、性格も住む場所も全く違う。自分勝手に支配欲が強い湯婆婆に比べ、銭婆は温かく見守る母親のような存在感がある。また、宮崎駿監督の作品で他にも2つの名前が使われているものがある。『となりのトトロ』のサツキとメイである。両方の名前とも「5月」からきており、もともとの設定は1人の人物であったとされている。このように、2つの名前（2人の人物）には何か訴えかけるものがあるのではないかと、私は次のように考えた。

人間は年を重ねるにつれ多くの経験をして成長していく。自分とは違う生き方や考え方に触れ、自分自身を見つめ直し、様々な価値観を学ぶのではないだろうか。千尋の場合も、不思議な世界の中で、いくつもの困難を乗り越え成長していく。「千」でいる時の千尋は、自分の意識とは関係なく多くのことを学んでいるのである。しかし、人間が変わるというわけではなく、千尋の中にある信念や能力は同じである。トンネルをくぐる前の千尋も湯屋の「千」も再び現実世界に戻ってきた千尋も、すべてが千尋の人格なのである。また、湯婆婆と銭婆婆は、お互いが目を背けている自分自身なのではないかとも思う。この2人の存在が示している意味はここにある。自分の弱さや認めたくない欠点に向き合うことの大切さを示しているのだろう。『となりのトトロ』では、サツキは迷子になったメイを探す。これは、自分自身を探しているのではないだろうか。自分が見えなければ、いくら周りから良い刺激を受けようとも内面の成長はできない。常に自分を忘れずに生きていくことの大切さが込められているのではないだろうか。「神隠し」にあうことによって、千尋に隠されていた様々な可能性が動き出していったのではないか。私は、『千と千尋の神隠し』という題名には、異なる名前を持たされながらも成長していくこと、自分を見失わず辛い中でも生き抜いていくことなど、深い意味が込められているのではないかと考えた。

私はこの分析を通して、名前大切さを強く実感することができた。人との出会いでは必ず最初に自分の名前を紹介する。教育現場でも、教師と生徒それぞれが自己紹介をする。私は、生徒たちは名前を呼ばれることによって、自分の存在が認められたと感じるのではないかと考えた。生徒たちの存在を、1人1人しっかりと認め理解するためにも、名前は特に重要である。1人の人間としての人格が完成されていない未成年の時期だからこそ、自分の名前大切さを感じさせることによって、秘められた可能性を導き出していきたい。そして、今まで以上に名前というものを大切にすることを忘れずに、生徒たちと深く関わっていきたいと思う。

(2.3) 千尋の成長

『千と千尋の神隠し』は、千尋に秘められた「生きる力」が動き出していく様子を軸に描かれている作品だと思う。この作品で宮崎駿監督が最も言いたかったのは、主人公である千尋の成長ではないかと私は考えた。

千尋の第一印象は、今までのジブリ作品の登場人物とは違い躍動感もなく、人付き合いが苦手な素朴な印象が強い。親に言われるままに行動し、好奇心も強くない。行動ものろく、見ている人に鈍くさい少女であると感じさせてしまう。そんな少女が不思議な世界に迷い込み、ありえない体験をする。両親が豚に変えられたり、自分の姿が透けてきたり、この世のものとは思えないモノに出会ったりと、どうしていいのか分からずに動けなくなってしまう。そこで初めて助けてくれたのがハクである。ハクに導かれるようにして、千尋の成長が

始まっていく。千尋は湯婆婆や湯屋で働く人々から様々なことを学ぶ。

最初に学んだことは挨拶である。これは、リンによって教えられる。挨拶というのは日常生活で最も基本となる行為である。千尋は10歳であるにも関わらず、挨拶どころか返事さえもできていない。リンや釜爺に感謝の気持ちを伝えなければならないときも、言われなければ挨拶できないのである。しかし、物語が展開するにつれ、千尋はしっかりと挨拶ができるようになる。銭婆の元へ訪れた時は、「失礼します」と言い、帰るときには「ありがとう」と告げる。挨拶が自然とできるようになったことは千尋の成長の1つであると言えるだろう。

次に、千尋はオクサレサマを満足させることに成功して成長する。ここでは、考えて行動すること、1人ではできないことでも仲間と協力すれば成し遂げられることを学ぶ。オクサレサマは酷い臭いを放っており、誰もが嫌がる存在であった。千は湯婆婆に命じられ、1人でオクサレサマを癒すこととなる。千は知恵を絞りながら、オクサレサマを綺麗にしようと努力する。そして、ごみがつまっていることに気づき、湯婆婆や湯屋の人の力を借りながらなんとか1つの大きな仕事を終えるのである。千尋はこのことによって今までにないような達成感を味わう。さらに千尋に大きな影響を与えたのは、湯婆婆からの抱擁だったのではないか。湯屋では人間というだけで嫌われていた千だが、この時初めて湯屋の一員として認められ、千という人物が理解されたのである。10歳の子どもにとって、大勢の人の前で褒められるという行為は、自尊感情を養うことにもなり、これからの試練にも立ち向かう勇気となる。千はここでもまた1つ成長したのである。

少しずつ視野が広がり、成長していこうとする千尋にさらに大きな影響を与えるのはハクの存在である。ハクを助けるために、危険なことにも臆せず立ち向かい、自分自身の強い心で進んでいく。初めは誰かの命令などにより、自らの意思とは関係なく行動していたが、不思議の世界に来て初めて自分の意思でもって行動する。そしてカオナシにも存在する場所を与え、ハクのことでも救うことができたのである。今までは自分のことで精一杯だった千は、他人のことを考え、他人のために行動できるようになったのである。視野が広がり、色々なことを多様な角度から見ることができるようになったから、幼少時代のハクとの思い出も思い出すことができたのではないだろうか。ハクが目からきつぎがとれたように、千尋の表情にも輝きがでてきている。これは千尋という人間の中に隠されていた能力が表面に出てきたことを表しているのではないだろうか。

千尋は、このような大きな経験を積んだことで視野が広がり、やり遂げることの素晴らしさを感じたり、感情を素直に吐き出すことの大切さを学んだり、感謝する気持ちを忘れてはならないことなどを学んだのである。

3. 『崖の上のポニョ』教材分析

(3.1) あらすじ

満月の光が海面を照らす静かな夜。小さな魚の女の子・ポニョは、海底で仕事をする父・フジモトの隙を見計らい、家出を図った。彼女は朝陽がきらめく内海にたどり着いたのだが、偶然通りかかった漁船の底引きに捕らわれそうになる。ジャムの瓶に頭が挟まりながらも、何とか網から抜け出した。しかし、今の状態ではうまく泳げず、浅瀬の方へと流されてしまう。

そんな彼女を、崖の上の一軒家に住む5歳の男の子・宗介が助け、バケツに入れて保育園へと連れて行った。宗介は、友人のクミコちゃんやデイケアセンターに通うおばあさんたちにポニョを紹介した。行動を共にするうちに、ポニョは宗介のことが好きになる。対する宗介も、ポニョは自分が守ると決心する。けれども、フジモトに見つかってポニョは海の世界へと連れ戻されてしまう。宗介は、唐突に訪れた彼女との別れに打ち拉がれるのだった。

この日の晩は、航海に出ているためほぼ家を空けている宗介の父親・耕一が帰ってくる予定だったが、急な仕事で家に戻れなくなってしまった。その事実を耕一からの電話で知った宗介の母親・リサは、怒りの感情を表に出す。耕一と発光信号で連絡を送り合う際、いじけた態度を取るリサに対して、宗介は優しく慰めの言葉をかける。そんな息子の姿を見た彼女は、宗介を抱きしめて夕飯の支度を再開する。

一方、ポニョは、フジモトによって泡の中に閉じこめられていた。フジモトは、ポニョの母親・グランマンマーレと直談するため留守をしている。ポニョは、宗介との出会いをきっかけに、人間になりたいと願うようになっていた。すると、彼女の体は魚から半魚人へと姿を変えていく。妹たちの力も借りて、泡の中から脱出した彼女は、フジモトが蓄えていた魔法の力を宿す生命の水を浴びて人間の姿となり、宗介のもとへ大波に乗って出発する。

宗介の住む町には、かつてないほどの大型の台風が訪れていた。この状況の中、無事家路について宗介とリサは、道の真ん中に1人の女の子が立っているのを確認する。すると、女の子は勢いよく宗介に駆け寄って抱きついた。突然の出来事に驚く宗介だったが、彼女の姿を見てポニョだと気づき、感嘆の声を上げる。宗介とリサは、ポニョを快く迎え入れた。ポニョも、2人と過ごす人間としての生活を心から楽しんだ。しばらくして、リサはデイケアセンターのおばあさんたちが心配になり、仕事場に戻ることを決断する。自分もついて行くと主張する宗介。しかし、彼女は絶対に戻ってくると約束を交わし、子どもたちに留守番を頼んで車を走らせた。

翌朝、外の様子を確認すると、辺りは一面水で覆われていた。宗介とポニョは、魔法で大きくしたおもちゃのポンポン船に乗って、リサを探す冒険に出る。そして、航海中に出会った船団の指揮官から、デイケアセンターの人々は前山公園に避難したという情報を得る。2人はそこを目指してしばらく船を走らせ、船から降りて目的地に続く車道を歩いている途中、ついリサの車を発見した。が、リサの姿は確認できない。なお歩き続けると、古びたトンネ

ルに辿り着いた。トンネルに入ると、次第にポニョの体が半魚人へと姿を変えていく。宗介は、彼女を抱きかかえ、出口へと一目散に走る。トンネルを抜け、慌てて出口の前に広がる浅瀬にポニョをつけるが、彼女はさらに魚の姿に変化してしまう。そこにフジモトが現れ、2人をリサやおばあさんたちのいる場所に連れて行こうとするのだが、トキさんがそんなやつに騙されるなと宗介に声をかける。宗介は、ポニョを抱えてトキさんの方へと駆け出す。その行動にフジモトは慌てふためきながら、宗介たちに向かって水魚を解き放つ。

気がつくと、宗介たちはリサやおばあさんたちがいる場所にいた。そして宗介の目の前にはグランマンマーレの姿。グランマンマーレは、古い魔法でポニョを人間にしようと考えていた。そのためには、宗介のポニョを大切に思う揺るがない気持ちが成功の鍵となる。結果、魔法は無事成功した。こうして、ポニョは宗介と共に、人間として生きていくのだった。

(3.2) 説明の少ない物語

本作には、嵐や大波によって町が海の底に沈んだり、月が徐々に地球に接近してきたりと、まるで世界が滅亡してしまいそうな表現がなされている。この時、地球では何が起こっていたのだろうか。

ポニョの父親であるフジモトは、かつて人間だった。が、海を汚す人間の所行に絶望したことをきっかけに、人間を恨み、海で生活を送ることを決断する。彼は、魔法の力を宿す生命の水を井戸に蓄えていた。この水を使い、陸上中心で人間が主導権を握っている現世を、海中心の世界に変えようと計画しているのだ。この思惑が窺えるフジモトの台詞が存在する。「この井戸がいっぱいになった時、再び海の時代が始まるのだ。カンブリア紀に比肩する生命の爆発。忌まわしい人間の時代が終わるのだ」。この台詞から、生命の水には人間が誕生する以前の時代であるカンブリア紀に現世をリセットする力が備わっていると分析できる。そのためには、井戸を満たす量の生命の水が必要となる。このような計画を達成するために、フジモトは生命の水を蓄えていたと考えられる。

だが、そんな大切なものを、ポニョはフジモトがいない隙に全て使い果たしてしまう。こうしてポニョは、人間の姿に化けたり、大波を起こしたりする強力な魔法の力を手に入れた。けれども、彼女が大波を起こしたことが引き金となり、世界は刻一刻と滅亡しようとしている。大波は、重力場の崩壊によって生じる。重力場とは、文字通り重力が働く場所のことだ。重力は、地球の引力と地球の自転の遠心力が合わさった力を指す。本作では、人工衛星が落ちてきたり、月が地球に接近したりする場面が描かれていた。これらが表すのは、ポニョの起こした大波によって重力のバランスが不安定になり、地球の引力が強くなってしまったということだろう。

さらに、月が地球に接近したことで異常な海面上昇も起こってしまった。潮の満ち引きは、月の引力によって起こる。地球と月の距離が近いほど、月の引力は強く働き、海面は上昇す

る。本作では大波が起こった場面以降、2度満月の様子が確認できるが、徐々に満月が地球に接近している場面が窺える。つまり、町が水で覆われているのは、月の引力で異常な海面上昇が起こっているためと考えられる。フジモトは、海中心の世界を望んでいたが、世界が滅亡することまでは望んでいない。大波を起こした張本人のポニョも、大波を起こした動機は宗介に会いに行くためだけであり、5歳の彼女がこのような現象を想起して魔法を使ったとは考えづらい。

では、本作はどうしてこのような世界の滅亡の様子を具体的に説明しなかったのだろうか。それは、本作が「子ども」をテーマにしているためだろう。宮崎駿監督は、前作『ハウルの動く城』の内容が複雑過ぎたことを反省し、観るだけで楽しいと思える内容に本作を仕上げたいと語っていた。また、大波を最大の見せ場とし、大災害になる当たり前の展開を非現実的に描いて、子どもたちを冒険の世界に誘いたいと企画立ち上げの段階から構想していた。ポニョが大波に乗って宗介のもとを訪れた翌日、外は見渡すかぎり海が広がっていた。そんな現状を2人は悲しむ素振りも見せず、むしろ楽しそうに過ごしている。本作は、宮崎の言葉を引用すると「類例のない空想豊かな娯楽作品」である。彼は、構想通りの作品を完成させたと言える。ゆえに、前述したような世界が破滅に向かっている具体的な説明は、本作には不要な表現なのである。

(3.3) 生まれてきてよかった

ジブリ作品には、その作品の内容を象徴するキャッチコピーがつけられることで有名である。本作は「生まれてきてよかった」である。私たちに誕生した喜びを伝えているように感じさせる表現である。

物語上、誕生した喜びを最も感じた登場人物は、宗介に出会って人間になりたいと願ったポニョであろう。特に、大波に乗って宗介の家を訪れた場面は、人間の姿になった彼女にとって初めて五感を働かせる機会となった。ライトの輝きやバスタオルの肌触りなど、彼女は初めて体感する1つひとつの事象を楽しそうに受け入れている。また、手足が生えたことで家中を走り回る様子などからも、人間となった喜びが窺える。このような楽しさや喜びは、魚の姿だったら感じることはできなかった。この時、彼女は心から人間になって良かったと思ったはずである。そして、このようなポニョの想いは、キャッチコピーの意味にも繋がっていると分析できる。

他にも、「誕生」の喜びを感じさせる場面がある。宗介とポニョがボンボン船に乗っている途中、若い夫婦に出くわす場面だ。婦人は赤ちゃんを抱いており、その赤ちゃんは不機嫌そうな表情をしていた。ポニョは、言葉を使わないやりとりで、赤ちゃんがお腹をすかせていると察する。スープやサンドイッチを自ら差し出す場面が続くことから、彼女の行動の意図は証明できる。さらに、宮崎がスタッフに配布する絵コンテにも「ポニョ 何かをいっし

んに聞いているのです」と記されていた。この指示から、ポニョには言葉を発することのできないものの気持ちを読み取る能力が備わっていると言える。

しかし、両者が別れる際、赤ちゃんは猛然と何かを訴えるかのように大声で泣き出してしまふ。赤ちゃんは何を感じてこのように泣いているのだろうか。宮崎の手掛けるジブリ作品は、現代のあらゆる出来事が反映されている。このことを踏まえて、赤ちゃんが泣いている理由を考えてみると、様々な問題を抱えた現代に生まれたことへの不満を表現していると考えられる。嵐や大波が押し寄せた翌日の状況を現実的に考えると、今、世界で問題になっている地球温暖化を想起させる。現代は、経済発展などの理由で開発が進み、地球に悪影響を与えている時代だ。この先、地球が以前のような美しい姿に完全に戻ることは、まず考えられない。逆に、新たな問題を抱える可能性の方が大いにあり得る。そんな時代に生を受けた子どもたちは何を思うか。それを印象づけるのが、この赤ちゃんの表情や涙を流す姿、つまり、この時代に「生まれてこなければよかった」という不満の気持ちだと言える。

現代は、安心して生活するには難しい世の中だ。しかし、そんな世の中でも幸せを感じられる場面は多数存在する。ポニョは人間として生きる喜びを実感した。魚だった頃、外界に触れることなく泡に閉じこめられていた彼女だからこそ、その想いは誰よりも感じているはずである。そんなポニョだからこそ、不満を感じて大声で泣いている赤ちゃんに対し、本作のキャッチコピーのように「生まれてきてよかったんだよ」と、言葉のいらぬやりとりで伝えることができたのではないか。これは、ポニョが赤ちゃんに駆け寄り、顔をなで回し、額を合わせる場面で表現されている。ポニョは、単に人間になりたいと願う魚の女の子ではなく、人間として現代を生きる楽しさや喜びを観客に伝える役割を担っているのである。

4. 宮崎駿作品から発信されるメッセージ～『千と千尋』と『ポニョ』の場合～

(4.1) 2作品に共通するメッセージ性

『千と千尋の神隠し』と『崖の上のポニョ』、これら2作品のあらすじ、読解のポイントとして着目すべき点などについては、第2章、第3章に詳しく述べられている通りである。異なる2つの作品ではあるが、作り手(宮崎駿監督)から子どもたちへ、共通したメッセージが読み取れる箇所がいくつかある。これらは後に第5章の「授業プラン」第10時間目で提案する、「両作品に共通するテーマを《読む》」の部分に関わる内容である。以下、それらについて述べておく。

(4.2) 自然と人間

宮崎駿作品には、この2作品以前にも、自然と人間の共存をテーマにしている作品がある。例えば『風の谷のナウシカ』に見られる「火の七日間戦争」後の「腐海」に覆われた世界とそれに対峙する人間の姿や、『もののけ姫』におけるタタラ場と森と人、などなど。これら

ほど強烈なメッセージ性は見られないものの、『千と千尋の神隠し』にも、自然と人間のありようを考えさせる場面は少なからず、ある。そもそも、万物に宿る八百万の神々(宮崎は「神々」を「靈々」と表記する)が、人間によって汚され、疲れ果て、「油屋」(湯屋)に癒しを求めてやってくるという設定が批評性に富んでいる。なかでもオクサレさまと称する、実は高名な川の神の汚れぶりは、それを見る子どもたちにも強い印象を残す場面である。一方、『崖の上のポニョ』においては、海の浅瀬に散らばるさまざまなゴミ、そしてそこにあった瓶に頭を挟まれてしまうポニョ。かつては自身も人間だったが、その人間が母なる海を汚すことを許せず海で暮らすことを選んだポニョの父、フジモト。さらにいえば、宗介の母リサが買い物を終えて出てくるその手には、スーパーのレジ袋ではなく、マイバッグや紙袋が持たされていることも、環境に配慮した場面とっていいかもしれない。「自然を汚す人間」というモチーフのもと、2作品を見比べ、「共通点探し」をすることで、作り手のメッセージにより近づくことができるのではないか。

(4.3)名前の尊重

「名前」に関しては、すでに第2章で一氏も述べているが、『千と千尋の神隠し』においては、名前が奪われるというモチーフが強調されている。名前を奪われるということは、相手に支配されることでもある。このことは、ファンタジーの世界、例えばル＝グウィン『ゲド戦記』などにも見られるし、日本でも絵本『大工と鬼六』では、名前を知られた鬼はたちどころに力を失ってしまう。つまりは名前(＝言葉)の持つ呪術的な力を表している話型だと考えられるが、ここでは少し異なった角度からこのことについて考えさせたい。宮崎駿監督作品(一部、宮崎駿脚本作品)において、登場人物が相手の名前を尋ねた際、必ずといっていいほど「いい名前だね」と答えているのだ。『崖の上のポニョ』では、グランマンマーレが「ポニョ…いい名をもらったのね」と言い、『千と千尋の神隠し』では、「私の本当の名前は千尋っていうんです」という千尋に、銭婆は「千尋…いい名だね。自分の名前を大事にね」と言う。記号としての「名前」のみならず、その名前を持つ相手の存在そのものに対する尊重が、この2作品からもうかがうことができることを気づかせたい。

(4.4)愛するということ

『千と千尋の神隠し』における千尋は、「千」にされた後も、豚になってしまった両親を救うべく、湯屋のある世界で働くことを選択するのだが、物語の途中から、自分を助けてくれるハクを救いたい一心で動き出す。ハクと千尋に何があったのか尋ねるリンに対して釜爺が答える。「判らんか、愛だ、愛」。『崖の上のポニョ』においても、偶然見つけたポニョに、宗介は「僕が守ってあげるからね」と言い、フジモトに連れ戻されたポニョに対しては、守ってあげられなかった自身のふがいなさを嘆く。またポニョの母、グランマンマーレが古い

魔法によってポニョを人間にしようとするとき、「僕、お魚のポニョも、半魚人のポニョも、人間のポニョも、みんな好きだよ」と迷いのない宣言をする。一方のポニョの宗介に対する思いも一途だ。「ポニョ、宗介、好き一つ」「ポニョ、人間になる一つ」「ポニョ、宗介んとこ、行く一つ」。どれもシンプルで幼い言葉ながら、やはり両親やきょうだいに対するものとは明らかに異なる思いがそこにはある。千尋も、宗介も、そしてポニョにとっても、それは「初恋」と呼ぶにふさわしい感情のほとぼしりが、どちらの作品からも読み取ることができる。

(4.5) 生きる力の獲得

『千と千尋の神隠し』のテーマの1つに「生きる力の獲得」があることは、第2章でも述べられている。カードも財布も通用しない世界において、さまざまな助けを借りながらも千尋は困難を切り抜けていく。湯婆婆と対峙し、カオナシと向き合い、ハクを救い、両親を元の姿に戻す。湯屋を離れるラストシーン、挨拶すらできなかった弱々しい千尋の姿はもうそこにはない。作品を見ている観客も、たくましく成長した千尋を、湯屋の人々と共に見送ることができる。

「生まれてきてよかった」——『崖の上のポニョ』のこのキャッチコピーの意味合いについては、第3章で岡部も詳しく述べているので繰り返さないが、あの赤ちゃんとのコミュニケーションが成立する場面は、たぶんこの物語が終わったところから始まるであろう人間として生きるポニョ自身の安心であり、赤ちゃんであれ、ポニョであれ、新しく人間の世界で生きていこうとする存在に対する作り手の(あるいは観客の)祝福と捉えることができよう。

さて次章では、これまで行ってきた作品分析を元に、実際の学校の現場で、これら映像作品をどのように国語教材として用いることができるか、試案を提示してみたい。

5. 授業プラン～高1国語(現代文)～

(5.1) 基本的な立場

学校の現場において、映画を視聴覚教材として用いる場合、一般的には次のようなケースが考えられよう²⁾。

- (1)学習のはじめに動機づけとして利用する。
- (2)講義の中で学習資料の1つとして利用する。
- (3)映画そのものを主要な教材として利用する。
- (4)学習のまとめとして利用する。
- (5)映画会等の開催に利用する。

ただし、第1章で宮崎駿のアニメーション作品が読解の対象たりうること、それゆえに国語教育の現場でも教材として用いられるようになってきていることに触れ、第2・3・4章と読解のポイントや共通テーマについて論じてきた。その流れからすれば、これらの映像作

品2本に対する私たちの立場が(3)であることは言うまでもない。したがって、私の提示する国語の授業プランは、『高等学校学習指導要領 第2章 各教科 第1節 国語』第1学年の「C 読むこと」に明記された次の各項の内容、

- ア 文脈の中における語句の意味を的確にとらえ、理解すること。
- イ 文章の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見などを読み分け、目的や必要に応じて要約したり要旨をとらえたりすること。
- ウ 場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、内容の理解に役立てること。
- エ 文章の構成や展開、表現の特徴について、自分の考えをもつこと。
- オ 文章に表れているものの見方や考え方をとらえ、自分のものの見方や考え方を広くすること。
- カ 本や文章などから必要な情報を集めるための方法を身に付け、目的に応じて必要な情報を読み取ること。

を踏まえながら、「A 話すこと・聞くこと」の「日常生活の中の話題について報告や紹介をしたり、それらを聞いて質問や助言をしたりすること」、あるいは「B 書くこと」の「関心のある芸術的な作品などについて、鑑賞したことを文章に書くこと」といった学習活動につなげていくものになる。

単元名は「**宮崎駿作品の個別的な読解と比較による共通性の把握**」としたい。授業を担当する教師間ではこれを用いながら、生徒向けには、「**ハヤオでバトロウ！～『千尋』と『ポニョ』の世界を自分はどう読む～**」といった形で、ややくだけた雰囲気の単元名を提示してもよいだろう。

(5.2) 単元設定の理由

宮崎駿監督のアニメーション映画『千と千尋の神隠し』と『崖の上のポニョ』は、生徒たちにとって馴染みのある作品だと思われる。さらにそれらを繰り返し観たという生徒も多数いるだろうが、作品にこめられたテーマを逐一拾い上げて考えたなどという生徒となれば当然ながら皆無に近いはずである。

国語の教材は教科書という紙の上に文字で書かれたものばかりではなく、国語で必要とされる「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の技能は、映像作品を教材としても発揮しうるもの、養いうるものだと気づかせたい。これらの技能が、文字テキストのみならず、慣れ親しんだ映像テキスト（ひいては友達同士の関係や家族との日常など、いわば自身の生活や人生というテキスト）と向き合う営みにも連動していると意識化することで、通常の教材を含めた国語学習への取り組みに対する意欲や態度を変化させていく契機になればと考えている。

(5.3) 単元の指導計画 (全10時間)

- 第1時限目 事前指導・映像作品を《読む》ということ
- 第2時限目 作品鑑賞①『千と千尋の神隠し』(DVD125分のため、3時限に分けて視聴)
- 第3時限目 作品鑑賞②『千と千尋の神隠し』
- 第4時限目 作品鑑賞③『千と千尋の神隠し』
- 第5時限目 グループ討論・発表①
- 第6時限目 グループ討論・発表②
- 第7時限目 作品鑑賞④『崖の上のポニョ』(DVD101分のため、2時限に分けて視聴)
- 第8時限目 作品鑑賞⑤『崖の上のポニョ』
- 第9時限目 グループ討論・発表③
- 第10時限目 事後指導・両作品に共通するテーマを《読む》

(5.4) 単元の学習目標

- ① 映像作品が内包する情報から、様々な意味を読み取りながら（あるいは自分なりに意味を付与しながら）他の情報と組み合わせて作品の〈主題〉をより深く把握する力を伸ばす。
- ② 自分なりに問題意識を持って作品に向き合い、作品内の情報を拾い上げたり、それをとりとまとめて発信（発表・報告）する中で、自ら課題設定し解決していく態度を育てる。
- ③ 同じ作者の手になる異なる作品を対比する中で、個別作品の持つメッセージ性を捉えるとともに、両者に共通する〈主題〉について捉えることができるようにする。

(5.5) 単元の学習活動「ハヤオでバトロウ！～『千尋』と『ポニョ』の世界を自分はこう読む～」

時限	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1	<p>○文字で書かれた物語作品を読み解くのと同様に、映像作品を読み解く作業に取り組むことを確認する。</p> <p>○教科書で出会ったファンタジー作品を読解する時、学習活動のポイントはどんな点にあったか振り返る。</p>	<p>◎ビデオ鑑賞の前に視聴のポイントや項目を明確にし、生徒たちに予め問題意識を持たせるように事前指導するやり方もあると思うが、学習者1人1人が視聴中に考え、考えながら視聴する作業の結果、自分たちで視聴のポイントを発見させることをめざしたい。</p> <p>◎全くとっかかりがないと、生徒たちも戸惑うだろうから、次のような留意すべきポイントを示しておく。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① あらすじや構成（現実→非現実→現実） ② 中心人物の変化とその契機、中心人物の対人関係（同調者・対立者など） ③ 個性的な表現や反復される表現（心理描写・自然描写・行動描写、象徴的な事物など） ④ 作品が発信しているテーマ（自分なりの理解）

	○『千と千尋』と『ポニョ』両作品の成立事情について、教師の解説を聞く。	◎物語内容には詳しくふれない。様々なテーマを拾い上げることが可能な作品であることを示唆する。
2 ・ 3 ・ 4	○DVD『千と千尋の神隠し』を視聴する。 ○前時に確認した4つのポイントに留意しながら、適宜、メモを取る。	◎視聴後にグループ討論を予定しているので、その備えとして、上記の留意すべきポイントを踏まえながら、随時メモを取るよう指示する。
5 ・ 6	○グループごとに話し合い、『千と千尋』のあらすじを整理し、登場人物の相関図を作成する。 ○グループごとに、映像作品中で気になった言葉や場面、描写などを自由に挙げ、その意味や効果を検討する。 ○グループごとに、読解の手がかりになりそうな項目を踏まえ、映像から読み取った本作品のテーマについて話し合う。	◎話し合い後、いくつかのグループに発表させ、クラスの共通理解として、あらすじと登場人物の相関図を確認する。 ◎話し合い後、全グループに順に発表させ、板書する。映像作品を読み取る手がかりになりそうな項目を一斉授業の中で拾い上げさせる。 ◎テーマ論議が恣意的・感覚的になってしまうよう映像中の根拠をあげながら論じるよう指示する。 ◎話し合い後、全グループに発表させ、板書する。発表されたテーマについて、一斉授業の中で互いに検証させる。 ◎今回の一連のグループ討議では、次のようなことを意識させたい。同時に、今回の話し合いを経て、『千と千尋の神隠し』の表現やテーマへの注目の仕方、手がかりや指標の確認を行いたい。 ①他の生徒がどんなことを読み取ったか知る。 ②自分も共感できるのか、それとも反発してしまうのか。あるいは、全く気付かなかったことなのか、自己確認させる。 ③生徒同士の捉え方・感じ方の差や、教師が提示する捉え方の差を踏まえながら、それぞれの読み取りを比較する。
	○『崖の上のポニョ』の成立事情について、教師の解説を聞く。	◎この作品が(本来のアニメの視聴者たる)子どもたちに解りやすい作品であることを目指したという成立背景を説明する。

7 ・ 8	<p>○DVD『崖の上のポニョ』を視聴する。</p> <p>○第1時に確認した4つのポイントに留意しながら、適宜、メモを取る。</p>	<p>◎前回の視聴時と同様、上記の留意すべきポイントを踏まえながら、随時メモを取るよう指示する。</p> <p>◎子ども向けであるからということで、前回取り組んだ『千と千尋』に見られたようなテーマは鳴りを潜めていたり、薄められたりしているのか等、先の作品の議論を想起しながら視聴させたい。</p>
9	<p>○グループごとに話し合い、『ポニョ』のあらすじを整理し、登場人物の相関図を作成する。</p> <p>○グループごとに、映像作品中で気になった言葉や場面、描写などを自由に挙げ、その意味や効果を検討する。</p> <p>○グループごとに、読解の手がかりになりそうな項目を踏まえ、映像から読み取った本作品のテーマについて話し合う。</p>	<p>◎話し合い後、いくつかのグループに発表させ、クラスの共通理解として、あらすじと登場人物の相関図を確認する。</p> <p>◎話し合い後、全グループに順に発表させ、板書する。映像作品を読み取る手がかりになりそうな項目を一斉授業の中で拾い上げさせる。</p> <p>◎話し合い後、全グループに発表させ、板書する。発表されたテーマについて、一斉授業の中で互いに検証させる。同時に、『千と千尋』で読み取ったテーマと共通するものを本作品が持っているか検討させる。</p>
10	<p>○教師との対話を通じて、学習のまとめに取り組む。</p> <p>○両作品の読み取りに関する感想文課題に取り組む(宿題)。</p>	<p>◎両作品それぞれが持つテーマや視聴者に向けて発信されたメッセージについて、授業時の議論を踏まえながらまとめる。</p> <p>◎続いて、別個のものであるはずの両作品に見受けられる、作り手がこめた共通のテーマやメッセージについて、授業時の議論を踏まえながらまとめる。</p> <p>◎映像作品を読み取るという過程が、実は文字で書かれたテキストの場合と同じような過程であることを再確認させたい。すなわち、対象を読むことと、その読み取った内容を伝える(話す、あるいは書く)ことという一連の営みは、さらには私たちの生活場面でもなされている活動に他ならないわけだから。</p>

6. 結びにかえて

今回は、あえて作品把握の視点を事前指導の段階ではなく、1作品目の視聴を終えた段階に設定した。視聴によって得たものや自分なりの意見を述べ、確かめ合い、その過程で話し合いの柱となるものを絞り込ませていきたい。その論議を経て獲得した視点(いわば自分たちで見つけた物差し)によって、2作品目の視聴に取り組むことになるから、議論はいつそう盛り上がるはずである。

本稿は、授業実践のための一例を示したものだが、宮崎アニメにとどまらず、自分の好きなアーティストの作品(それが映像であっても、また楽曲(特に歌詞の世界)であっても)を読み解いていくことの楽しさや、各々の作品の持つ奥深さについて捉えることができたなら、シンプルな日常的な営みの中ではあるが、それこそ学び問うことの入り口に立つことができたのだと、生徒たちに伝えることができればと願う。

注

- 1) 教員免許状更新講習「宮崎アニメを《読み解く》」(河原木有二担当。於：九州女子大学)。この講習に参加していただいた、特に高等学校の先生方から、『風の谷のナウシカ』『となりのトトロ』『もののけ姫』、またやはりスタジオジブリ作品『平成狸合戦ぽんぽこ』(高畑勲監督・脚本)を教材に、自然と人間の関わりを考えさせたり、『魔女の宅急便』や『耳をすませば』(宮崎駿脚本)から、少年少女の「成長」を読み取らせる授業の実践例などをお聞きすることができた。
- 2) 「視聴覚教材の利用方法について」(南さつま市立視聴覚ライブラリー『視聴覚教材目録』p.3、平成20年3月)

参考文献

- ・劇場用パンフレット『千と千尋の神隠し』(平成13年7月、東宝)
- ・ロマンアルバム『千と千尋の神隠し』(平成13年9月、徳間書店)
- ・フィルムコミック『千と千尋の神隠し』全5巻(平成13年9月、徳間書店)
- ・スタジオジブリ絵コンテ全集『千と千尋の神隠し』(平成13年10月、徳間書店)
- ・劇場用パンフレット『崖の上のポニョ』(平成20年7月、東宝)
- ・スタジオジブリ絵コンテ全集『崖の上のポニョ』(平成20年8月、徳間書店)
- ・フィルムコミック『崖の上のポニョ』全4巻(平成20年9～11月、徳間書店)
- ・ロマンアルバム『崖の上のポニョ』(平成20年10月、徳間書店)

***Sen to Chihiro no Kami-kakushi and Gake no Ue no Ponyo*
as Educational Materials in Japanese High Schools**

Yuji KAWARAGI, Yuki HITOUJI, Rikako OKABE

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities,

Kyushu Women's University

Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

No English abstract